

桜花の候 宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部会員の皆様には、恙なくお越しの事とご拝察申し上げます。憎きオミクロン株による3月6日迄の蔓延防止解除まで後1週間となり、このまま終息してくれば我々も大手を振ってニシタチへも行けるのですが.....

また先月は2年連続で当支部総会も中止を余儀なくされ、忸怩たる思いで書面決議となりましたが、会員皆様から1-4号全ての議案にご賛同を賜り感謝申し上げます次第です。

さらに今年になっても自衛隊関連行事の開催予定は立たず全くの白紙状態ですが、昨年末支部会員に送付した高等工科学校カレンダーでも眺めながら、遠く横須賀の武山駐屯地で祖国防衛に錬磨する少年自衛官達に元気と勇気を感じて頂けたら幸甚に存じます。

さて今月はなんと言ってもロシアのウクライナ侵攻を取り上げぬ訳には参りません。

そこで先ずは、83年前第二次世界大戦の嚆矢となったドイツとソ連によるポーランド侵攻・分割統治の歴史を、ウィキペディアから以下に引用して再確認したいと存じます。

ドイツとポーランドの間では、自由都市ダンツィヒの帰属とポーランド回廊の取り扱いについて対立があったが、外交交渉では進展はなかった。1939年3月に、チェコスロバキアが解体されると、イギリスは強く反発し、首相ネヴィル・チェンバレンは、ポーランドに保障を与えることを表明した。

英仏両国とドイツから、ソ連を自陣営に取り込む駆け引きが4月から8月の間続いたが、結局、ソ連はドイツを選び、8月23日に独ソ不可侵条約が締結された。この条約には、ポーランドの分割を定めた秘密議定書が付属していた。

9月1日に、ヒトラーは、自作自演の「ポーランド正規軍によるドイツ領のラジオ放送局への攻撃」（グライヴィッツ事件）およびポーランド国内でのドイツ人への迫害（そのような事実はほとんどないか、あっても針小棒大化したもの）ならびに16箇条の要求に対する無回答を開戦理由として、ポーランドに対する北部、南部、西部の3方面からの攻撃をドイツ軍に命令した。OKHはこの作戦に「白の場合(Fall Weib)」というコードネームを付けて準備していた。

9月3日に、ポーランドと相互防衛条約を結んでいた英仏両国は、ポーランド領からの即時無条件撤退を要求した最後通牒にドイツが回答しなかったため、ドイツに宣戦した。

ドイツと接する長大な国境線を、薄く浅くしか防衛準備できなかったポーランド陸軍は、開戦後すぐにドイツ軍に押されて東へと戦線を後退させられた。9月中旬にワルシャワ西方のクトノ市での反撃（ブルザの戦い）に失敗すると、戦局はドイツ軍に有利となった。ポーランド軍は、首都ワルシャワとルーマニア国境沿いのルーマニア橋頭堡（英語版）を固持し、英仏両国によるドイツ攻撃と救援を待ち、持久する計画であった。

9月17日、ソ連軍がポーランド東部へ侵攻を開始した。ポーランド政府は、ソ連による侵攻を予期しておらず、軍の主力は、対独戦に投入されており、東部国境の守りは手薄だった。9月18日に、ポーランド軍総司令官エドヴァルト・リッツ＝シミグウィ元帥は、国土防衛は不可能と判断し、国軍兵士にソ連軍との戦闘を避け中立国のハンガリーとルーマニアへ脱出するよう命令した。9月18日に大統領、国軍総司令官を含む政府・軍要人はルーマニアに脱出し、同国で抑留され、政府は機能を停止した。

空軍は、可動残存機に国外脱出命令を出したので、9月20日以降、ポーランド軍は空軍なしで戦闘を続けることになった。首都ワルシャワとその北部のモドリンには、各地の敗残部隊も逃げ込んで、総計20万近くの軍が立て籠もっていたが、9月17日よりドイツ軍の包囲攻撃が始まった。9月28日にはワルシャワ地区司令官とドイツ軍の間で降伏についての協定が成立し、9月29日にワルシャワは陥落した。

10月6日には、ポーランドでの戦闘は終了し、ポーランドは、独ソ両国によって分割された。(以上ウィキペディアから引用)

これ以降は小川先生のメルマガから抜粋しましたので読み比べて見て下さい。

#### ・第2次大戦前夜と酷似したウクライナ情勢

現在のウクライナをめぐるロシアの動きは、第2次世界大戦前夜のドイツの動きと驚くほど重なっており、2014年2月のクリミア併合が「ナチス・ドイツによるズデーデン併合を思い起こさせる」としたドイツのショイブレ財務相の警告よりもなお、リアリティを伴っていると言ってよいと思います。

今回はウィキペディアから関係の記述を引用し、浅学非才の私が誤った情報を提供しないようにしたいと思います。

「ナチス・ドイツによるチェコスロバキア解体は、第二次世界大戦直前の戦間期に国家社会主義ドイツ労働者党（ナチ党）政権下のドイツ（ナチス・ドイツ）が主導して中欧のチェコスロバキアを分割・消滅させた一連の過程を指す。特に、過程の一部として行われたドイツに対するズデーデン地方の割譲は、ズデーデン割譲またはズデーデン併合と呼ばれている」

「チェコスロバキア解体は、ドイツ、ハンガリー、ポーランドに領土を分割させられる1938年の第1段階と、独立運動を激化させるドイツの策動でスロバキア・カルパト・ウクライナとベーメン・メーレン保護領に分裂して消滅させられる1939年の第2段階からなる」なんと今回のウクライナ情勢と酷似していることでしょう。

そして、以下を読むと、プーチン大統領のロシアが戦争への道へと突き進むかに見えるのです。

「1938年3月、念願のオーストリア併合を達成したヒトラーは、次の領土的野心をチェ

コスロバキアに向けた。そして4月には対チェコ作戦（コードネーム"緑の件"）が立案され、次のように軍に指示した。

1. どんな原因もなく、また正当化の余地もないような青天の霹靂的奇襲は拒否。
2. 一時的に外交交渉を行い、徐々に事態を先鋭化しつつ戦争に導く。
3. 戦闘は陸軍と空軍の同時攻撃の必要。最初の4日間の軍事行動が政治的にも決定的。もしこの間に軍事上の決定的な成功がなければ、全欧危機に突入するのは確実。

上のような公文書を出した後、ヒトラーは行動を開始した。彼は、チェコ国内のドイツとの国境沿いの地域に多数のドイツ系住民（ズデーデン・ドイツ人）がいることを対チェコスロバキア戦略の重要な駒とした。まずオーストリア併合によって勢いついているズデーデン・ドイツ人にドイツ本国から大々的な支援を送り、自治運動を展開させた。さらに宣伝機関によって「圧迫されているズデーデンのドイツ人」という宣伝を国内に流し、ドイツ世論をも勢いづけた」

これに続く、「ドイツ国防軍の見通しも慎重であったため、ヒトラーは一旦侵攻を見送った」というくだりも、これまでプーチン大統領を支持してきたロシアの退役将校団によるプーチン批判と重ねると、今回は欧米諸国との首脳会談などによって兵を引くことになったとしても、決して油断することはできないことを教えてください。

KGB（国家保安委員会）の将校として東ドイツ駐在歴があり、ドイツ語に堪能なプーチン大統領は、おそらく第2次大戦前夜のドイツの行動を熟知しており、同様な行動をとることによって生まれる欧米諸国の危機感を逆手にとって、NATOの東方拡大を阻止するカードにしようとしているのではないか、と思われます。

チェコスロバキア解体に出たドイツに対して、英国チェンバレン首相は最大級の非難を浴びせたものの阻止する動きに出る事はなく、ドイツのなすがままになってしまいました。

今回、NATO諸国もまたズデーデン併合の教訓に学んでいるはずですから、軍事力によって現状を変更しようとするロシアを阻止するために、思い切った経済制裁などで不退転の覚悟を示すべきだと思います。日本もまた、中国の軍事力による現状変更を阻止するためにも、ウクライナ情勢への積極的関与は避けられません。以上（小川和久）

私の個人的な思いは来月申し述べたいと存じますので、この2文を読み比べた上での皆様のご感想やご意見を是非ともお聞かせ頂ければ幸いです。

令和4年3月1日

宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部長 小倉和彦